

「豊かな」社会の社会経済学的解析に向けて

梅 澤 直 樹

I はじめに

現代における環境問題について考察し、その解決に取り組もうとするならば、現代の消費者がどのような消費生活を営んでいるのか、そもそも商品の効用をどのような要因に求めているのかといった問題の検討が不可欠である。周知のように、資源の大量で急速な費消にせよ、あるいは廃棄物の大量排出にせよ、私たちの消費生活が生態系の安定した再生産を攪乱し、現代における環境問題の主要な要因のひとつをなしている。

にもかかわらず、従来、経済学はこの問題への接近に消極的であった。一方で、主流派経済学は、消費者の選好関数を取り扱いはしても、それを自らにとって外的に与えられた前提としか受け止めてこなかった。方法論的個人主義に立脚し、或る時代、或る社会において諸個人の選好関数が帯びがちな社会構造的的特性といったものに目を向けることはなかったのである。他方で、もっとも体系的に異端の経済学を展開したマルクス経済学もまた、現代の消費生活のあり方について積極的検討を試みようとはしなかった。マルクス経済学は主流派経済学を批判し、経済現象の制度的、社会構造的側面に迫ることを自らの存立根拠としてきたのではあったが、商品の二要因に関しては、価値こそが市場経済システムに固有の歴史性を帯びた特殊な要因、したがって社会構造的接近に値する要因であって、使用価値はむしろ財一般に共通する要因、それゆえ安んじて商品学に委ねておけばよい要因とみなしてきたのである。¹⁾

こうして、現代の消費生活のあり方の積極的検討は、制度派経済学の創始者

1) K.マルクス、岡崎次郎訳『資本論(1)』国民文庫、73ページ。

であり、主流派経済学を批判して、顕示的消費という社会的で非合理的な選好に光をあてたT.ヴェブレンや、記号消費論を駆使して現代的消費生活のあり方に鋭いメスを加えた社会学者J.ボードリヤールらによって遂行されることとなった。

さらに、ボードリヤール説は現代社会の解析に取り組む多様な思潮に刺激を与えた。カルチュラル・スタディーズもそうした思潮のひとつにほかならない。そして、浅見克彦『消費・戯れ・権力』のように、カルチュラル・スタディーズの業績を継承しながら、マス・コミュニケーションが現代社会の体制的再生産に果たしている機能を興味深く分析した作品も生み出されてきている。

だが、浅見の上記著作には、たとえば現代日本の消費者が階層社会の下でのサラリーマンやOLであったり、その予備軍としての生徒や学生であったりするという、トータルな生活者の一側面として消費者を考察する視点は弱い²⁾。生産中心主義に偏り過ぎてきた従来の政治経済学に猛省を促し、敢えて消費世界に視線を集中したとも推察されるが、この禁欲が現代社会からの脱出口を模索する氏の論議に一定の制約を課したことは否めない。

のみならず、じつは初期マルクスには、記号消費論から見ればあまりに素朴であり、また疎外論と結びついてよく知られた、かの労働論の派生でしかないとはいえ、一定の消費論が見出される。しかも、その素朴さがかえって現代消費社会の内包する一側面を照射しているところがある。

そこで、次節ではまず、マルクス説のうちに現代消費社会の社会経済学的解析に向けてどのような手掛かりが遺されているかを検討してみることにしたい。一方で、トータルな生活者の一側面として消費者を把握するためのどのような理論装置が潜在的には用意されていたのか、他方で労働論の派生としての消費論

2) カルチュラル・スタディーズの一部にあるポピュリスト的な傾向を、「能動的な意味生産という事実を、受け手がおかれている他の社会関係から切りはなし、それを孤立させて分析してゆく、その視野の限定と偏り」と批判しているように、浅見には一定の目配りはある。だが、現代日本の消費者が労働者や学生や主婦としてどのような生活を送っているのかと有機的に結びつけてその消費スタイルを立ち入って考察することは行われていない。浅見克彦『消費・戯れ・権力』社会評論社、2002年、87ページ。同書14ページ以下、103-109、114-115、118-121ページなどをも参照。

をより徹底して敷衍すれば何が見えてくるのかを検討してみたいのである。前者は、マルクス経済学が近代的な「生産の鏡」に毒されていて、現代社会の解析にはもはや機能しないとするボードリヤール説がどこまで正鵠を射ているかを検証するための準備をもなす。

次いで、そうしたマルクス説の検討を承けながら、ヴェブレン、ボードリヤール、浅見の各説について一定の考察を加えよう。そして終節では、それら四説を絡み合わせてみる。そのさいには、20世紀末葉の日本を顧みながら、トータルな生活者の一側面としての消費行動にも若干思いをめぐらし、現代的消費社会を把握するための社会経済学のあり方について展望を探ってみたい。

II マルクス説の再検討

マルクスは、資本制の市場経済システムの社会構造的解析を、なにより労働価値説を通じた搾取関係の解明及びそれと連関させてこの経済システムの機構や運動法則の把握に求めている。生産中心主義とみなされる偏向をもたらした所以である。しかしながら、少し仔細に見てみると、マルクスの価値論には価値実體論ばかりではなく、古典派を超えた批判的経済学ならではの業績と自負された価値形態論が含まれている。また、搾取論を重んずるなら資本と言ふとなにより産業資本形式が表象されがちであろうが、資本の一般的範式として商人資本形式が挙げられたりもしている。他方で、価値実體としての抽象的人間労働自体について言えば、それを交換＝等値という市場経済システムに固有の社会関係の結び結び方に由来する歴史的範疇と捉える見方と、さまざまな具体的労働に転用することが可能な労働ファンドという、諸社会体制が自らの存立を確保するために共通に抱える歴史貫通的課題としての社会的総労働の配分問題³⁾に関わる範疇と捉える見方とを、整理しきれずに併存させていた。

このようにしてマルクス説が、いまひとつ根拠づけが不明確であったり、混乱を抱えていたりしながらも、古典派とは異なる批判的経済学として有していた

3) 拙著『価値論のポテンシャル』昭和堂、1991年、71ページ以下参照

特性を、すっきり体系化してみせたのが宇野弘藏の原理論である。すなわち、宇野は、価値実体論を諸社会体制がその存立基盤として共有する歴史貫通的課題に関わるものと整理したうえで、交換という社会関係の取り結び方の特殊な形態がその自己展開の極北に価値実体の拠って立つ普遍の世界を包摂するというところに資本制的経済システムの特殊歴史的個性を認めた。その結果、まず流通論を形態論として純化させてその十全な展開を図り、ついでそれが生み出した産業資本形式の一局面として労働＝生産過程の考察に移行するという原理論体系を樹立したのである。

但し、宇野は生産価格論については実質的にマルクス説をそのまま継承したために、せつかくの上述の体系構想もその全き真価を発揮しえていない。そもそも、価値と生産価格、剰余価値と利潤それぞれの総計一致命題で流通形態の世界に価値実体の世界から直接的に箍をはめようとしたマルクスの構想は成り立たないものであった。⁴⁾すなわち、いわゆる転形問題論争が明るみに出したのは、むしろ流通形態の世界は諸商品の価格が相互に依存しあいながら自己組織的に構成されているということであった。かつ、これを認めたからといって必ずしも価値論を放棄しなければならないわけではない。生産価格体系を組織化する論理が自己増殖という、特殊な社会関係の取り結び方としての流通形態の世界に固有の論理であることに注目するならば、そうした世界を相対化する鏡として体制貫通的な社会存立の基盤に即した世界を措定することにも十分に意味が認められるからである。マルクスがリカードウの価値修正論を批判し、価値と生産価格とは次元を異にする世界であると捉えていたことを徹底して、流通形態論と価値実体論を異次元のものとして重層化させてこそ宇野の体系構想は真に活きるというわけである。

たとえば、生産価格体系についての上述の認識に則り産業資本形式もまごうかたなく流通形態であると理解したときはじめて、流通形態性を端的に表現する商人資本形式を資本の一般的範式として措定する意味が明確となる。のみな

4) 以下の叙述については、同上書第4章参照

らず、社会存立の体制貫通的基盤という枢要な世界を自らの運動過程のうちに包摂しているにもかかわらず、この世界から総計一致命題のような直接的な私たちでの規制を受けることなく、むしろ自己組織的な世界を展開するところに、メタ・システムとしての資本制経済システムの特徴、さらにそこから帰結する懐の深さや柔軟性を射程におさめることができる。

また、宇野は、価値実体論を留保して価値形態論として純化したことによって、マルクスが『資本論』冒頭での価値実体の導出方法に引きずられて需給の均衡状態を前提しがちとなっているという桎梏⁵⁾から解放されて、商品所有者が私的主体であることにあらためて目を向け、需給の均衡状態が諸私的主体によって作りだされるプロセスそのものを焦点化し、価値尺度論を澆刺とした理論に鍛え直した。だが、この宇野の優れた着眼も、商品所有者が私的主体であることにより徹底して内在し、商品の売買過程が交換価値の量的尺度のみならず、用いられる物差しの質⁶⁾そのものの摺り合わせ過程でもあることを浮き彫りにしてこそいっそう精彩を帯びたと解される。換言すれば、流通形態と価値実体を異次元重層体系化したところに成り立つ価値尺度論は、本来、商品の売買過程が、どこまでは公正な要求でどの線を超えれば暴利を貪ることになるのか、あるいはそもそも何は商品として金銭取引の対象にされえ、何はそれにはなじまないとみなされるのかといった、各市場経済システムの基本的な枠組みに関わって、諸商品所有者がそれぞれに背負う事情等に規定されながら持ち込む物差し⁶⁾を摺り合わせ、オーソライズされる基準を再生産してゆく過程でもあることを対象化しうる潜勢力を秘めた理論であったと解されるのである。

要するに、マルクスの経済学が内包していた混乱や誤謬を整理しながらその

-
- 5) たとえば、価値形態論において左右両極の非対象性が強調されながら、第二形態から第三形態への移行ではあっさり両極の入れ替えが行われたりといった限界に結びつく。
- 6) たとえば、同じく労働市場にて労働力商品を売買する場合にも、性別役割分業意識が強ければ主婦の労働力は売り手の側からも相対的に安価に値踏みされているというように、労働市場においてすべての商品に共通の物差しが適用されているわけではない。そうした主婦の労働力の売買を通じて、それに適用される物差し、ひいてはジェンダー意識が再生産されているわけである。拙稿「『価値形態論の見直しのために』再論」『彦根論叢』第331号、2001年、参照。

孕んでいた資本制的市場経済システムの歴史的特性への鋭い視線を生かしたとき、価値実体の立脚する社会存立の基盤の世界を包摂しつつ自らの論理で自己組織化したメタ・システムとして、資本制的商品の織りなす流通形態の世界を捉える批判的経済学の体系構想が成立する。それは、本来的には「社会」に埋め込まれてあったものとしての「実体」的な経済の世界に、全面的な商品経済化が進行して「社会」から遊離したところの「市場経済システム」の世界を対置するK.ポランニーの構想と相通じるものと言ってよい。したがってまた、価値実体論が立脚する経済原則は、「社会」に埋め込まれながら弾力的に貫徹してゆくゆとりないし遊びを備えた性格のものであって、目的合理性ないし効率性で厳しく締め上げられたような性格のものではないわけである。⁷⁾

さらに、そのように異次元重層化させて流通形態の世界と価値実体が立脚する世界を捉えたとき、前者の世界が私的^私主体によって織り上げられていることをあらためて鋭く見据えることができ、売買行為が各市場経済システムの基本的枠組みについて参加者の相互了解を再生産していく場でもあること、したがって再生産される相互了解に照応してそれなりに多様な諸市場経済システムが成立する余地のあることが展望されてくる。のみならず、そのことは、資本制経済システムがメタ・システムであって、その包摂する諸要因ないしサブ・システムの備える異質な論理をある程度まで柔軟に許容して、多様に自らを展開しうる懐の深さを持っていることを支える基盤ともなっているのである。

ついで、初期マルクスの経済社会学に内包されていた消費論の検討へと移ろう。周知のように、初期マルクスの労働論の要諦は、本能に縛られて行動するしかない動物に対して、「人間」は意識を備えた存在であり、したがって自己の個性に即した選択を行い（＝自己実現）、またそれを通じて自己の個性をいっそう磨いてゆくことのできる自由な存在であるというところにあった。だとすれば、

7) 宇野弘蔵が経済原則に論及する場合、効率性基準からの縛りをそれなりに強く念頭に置いているようにも思われるが、宇野から体系構想を受け継いだ山口重克などは明確に資本制経済システムだからこそ締め上げが強まることに論及している。山口重克『経済原論講義』東京大学出版会、1985年、81、84、87ページなど参照。

同じく「人間」の営みとして、消費行動もまた、意識を備えた自由な存在による自己実現を目指した営みと把握されておかしくない。じっさい、初期マルクスはまさにそうした認識を展開していた。

すなわち、『経済学・哲学草稿』の労働疎外論を承け、社会的存在としての「人間」の市場経済システムの下での疎外について考察を展開した「ミル評注」において、マルクスは次のように論じていた。「ある事物を欲求することは、その事物が私の本質の一部をなしているということを」きわめて明白に立証している、ないしその事物は「それなしですますことはできないし、またすますことを望まないもの、換言すれば、私の定在を完成し、私の本質を実現するのに不可欠とおもわれる」ものである⁸⁾。人間が何か或るものを欲求する (want) のは、自らが自らたりうるためにそのものが欠けている (want) からこそのことというわけである。つまり、労働のみならず消費もまた、本来的には、自らの個性の実現・陶冶にいそむ営みと認識されていたのである。

のみならず、上述の欲求論は、人と人との本来的な交流のあり方を次のようなものと想定することに通じていた。すなわち、欲求が上述のようなものであるかぎり、消費者にとって生産者は、自らの個性の実現のために、自らが自らたりうるために必須のものを提供してくれる、自らの「不可欠の一部」というほどに大切な存在と感じられる、と。生産者の側から言えば、労働を通じて、自己の個性を実現・陶冶する喜び、自らの労働が他者の人間的欲求を充たすにふさわしい対象物を供給しえたという喜び、他者が自らを上記のように大切な存在として認め、愛を注いでくれていることを感じる喜び、自らの個人的な活動のなかで自らの真の本質を、すなわち自らが共同的な存在であることを確認しえた⁹⁾と意識する喜びという4重の喜びを味わえるというわけである。

しかるに、貨幣というマモンが支配する市場経済システムの下では、次のような疎外が進行することとなるとマルクスは解した。まず、労働は営利労働へ

8) K.マルクス、杉原四郎/重田晃一訳『経済学ノート』未来社、100ページ。

9) 同上邦訳、117-118ページ。

と疎外され、自己の個性の実現・陶冶をさておいて、貨幣と交換される事物、貨幣として実現される事物を生産する営みへ転化することとなる。またそのとき、生産者にとって消費者は貨幣が偶々受け取っている仮象としか見えなくなる。もはや「貴君の需要と貴君の占有している等価物とは、私には同等の、つまりどちらでもかまわない名辞」でしかなくなっている¹⁰⁾のである。

では、このマルクスの、生産者の側から見た市場経済システムの下での疎外論を消費者の側から敷衍すればどのような情景が見えてくるであろうか。マルクス自身はそれに関わって次のような叙述を遺していた。「貴君の人間的な本質は、だからまた、貴君が不可避免的に私の生産と内面的につながっている存在だということも、私の生産に対する貴君の支配力を、つまり私の生産に対する貴君の所有権を意味するわけではない。……それどころか、貴君の欲求、熱望、意欲は貴君を私の生産物に依存せざるをえなくさせるのだから、それらはむしろかえって、貴君を私に隷属させる紐帯である¹¹⁾」と。

したがって、一方で、消費者の欲求自身はいぜんとして各人を各人たらしめる人間の本質の一部をなすものと捉えられていたこととなる。だがこれは、「人間」をいささか抽象的に前提し、そのときどきの「社会関係の総体」にほかならないものとしては未だ明確に措定しえていなかった初期マルクスの限界が露呈したものと解されるべきではなからうか。換言すれば、労働が営利労働へと疎外され、もはや「生命の自由な発現」であるより「生活の手段」を稼ぐ営みと化し、「私の個性は極度に外在化され、その結果、個性を働かせることは私にとって忌むべきもの、苦惱」でしかなくなったという状況¹²⁾の下で、消費者としてはなお「生命の自由な発現」ないし「生命の享受」¹³⁾であるような個性をそのままに保持しておられるであろうか。否、そもそも労働にさいして極度に外

10) 同上邦訳、113-115ページ。

11) 同上邦訳、113ページ。

12) マルクスが「人間」を「社会関係の総体」として把握したのは、フォイエルバッハテーゼにおいてであった。この意義をとくに強調した論者に廣松渉がいる。『マルクス主義の地平』勁草書房、1968年、など参照

13) 同上邦訳、103ページなど参照。

在化されるような「個性」自身、既に変質しているのではないか。

他方で、初期マルクスは、市場経済システムの下では貨幣という抽象性の権化が圧倒的な支配力を発揮することに対して鋭く批判的な目を向けながら、交換にさいしてその貨幣を保持し、主導権を握っているのは消費者であることをなお十分に対象化しえず、消費者をひたすら弱者に化してしまっただけではなかったか。換言すれば、マルクス自身が指摘しているとおり生産者は消費者の需要を消費者の保有する貨幣と無差別なものとしか見なくなっているように、消費者もまた生産者をもはや自らの「不可欠の一部分」をなす大切な存在として謝意と愛を込めて見るよりも、貨幣でどうにでも支配しうる匿名の存在としてしか認めなくなる傾向を帯びているのではないであろうか。

Ⅲ ヴェブレン、ボードリヤール、浅見説をめぐって

ヴェブレンが顕示的消費に光をあて、消費は他者の視線を強く意識しながら遂行される営み、ひいては人々が自らの社会的なアイデンティティを構築する営みであることを明らかにして、現代的な消費社会論に道を開いたことはよく知られていよう。また、かなりシニカルな視線を伴いつつ提示された19世紀末葉のアメリカの顕示的消費の実態に関する考察は、現代の消費者たちの理解にとってもなかなか示唆深い。だが、ヴェブレン自身は、顕示的消費論を単に現代消費社会論として提起したのではなかった。むしろ、有閑階級の理論として、人類が初期野蛮文化の時代から高度野蛮＝略奪文化の時代へ移行して以降の人類史を描く理論装置として提起していたのである。

すなわち、土地に密着して人々が生活していた時代には、「手近の物質的手段を非利己的に非個人的に最大限活用する」ことを求める製作者本能や親性傾向がまさっていた。だが、富が多少とも蓄積され、略奪への誘因が到来するとともに、日常的に不可欠で非英雄的な「尊敬に値しない」職業から免れた有閑階級が発生する。さらに、略奪的な文化段階から金銭的な文化段階への移行とともに有閑階級という制度がしっかりと根付いた。そして、働かなくとも生活

できるという自らの富，ひいては身分的優位性をみせびらかすための顕示的消費や顕示的閑暇も定着していった。

こうして定着した身分的優位性をみせびらかすための顕示的消費の担い手としては，消費財に関する識別力や鑑賞の作法を培わなければならないし，また彼らはそのための閑暇も有していた。しかも，「名声」という点では社会的秩序構造の頂点に立っている有閑階級の「生活の作法と価値規準」は社会全体に対する「規範」を与える。とりわけ現代では「社会階級相互間の区分線は不明瞭で流動的」となっていて，それだけに人々は「彼らよりも一段上の階層で流行している生活図式こそ自己の理想的な礼儀作法」と認識してその達成に全力をあげる。こうしたメカニズムを通し，上流階級の影響力が「ほとんど妨げられることなく社会秩序の最下層にまで及ぶ」こととなる。

とともに，金銭的競争心が弊害をも生んでいる現代において，「有閑階級はある程度まで産業的状況の圧力から保護されて」いるだけ，略奪的文化以前の「平和愛好的気質ないし原始未開の気質への先祖返り」を果たす確率も高いということにもヴェブレンは目を向けている。周到に自らの叙述に留保を施しながらこうした洞察を散りばめたヴェブレンの「制度の進化に関する経済学的研究」は，文明史としての有閑階級の理論としてたしかに興味深い¹⁴⁾。

のみならず，序節での問題提起に関わって，こうした顕示的消費及び閑暇の文明史が，「製作者本能と産業技術の発展」という生産世界の側からの文明史と有機的に結びついたものであったこととくに注意を促しておきたい。しかも，ヴェブレンは，消費世界の動向の決定権を生産世界の動向に委ねてしまうことはなかったが，それでも有閑階級を発生せしめた時点について言えば，「財産が略奪を誘発するのか，略奪が所有権を創始するのか，そのいずれにしても，金銭的文化の初期段階において結果する状況は，ほとんど同じである。そして

14) T.ヴェブレン，高哲男訳『有閑階級の理論』，ちくま学芸文庫，50-51，56，62-63，88-89，98-99，119-120，144，210，222，258ページなど及び松尾博訳『経済的文明論』ミネルヴァ書房，30，123-124，144ページなど参照。なお，「制度の進化に関する経済学的研究」は『有閑階級の理論』初版に付されていた副題にほかならない。

この状況が生産技術における進歩に立脚するという因果関係もまたほぼ同じことである」と述べていた。また、現代において産業の金銭的統制が肥大化していることへの懸念は、製作者本能に関わっては、次のように表明されている。「(現代の)産業技術の状態は、これらの関係者それぞれが賢明に無条件で協力しあい、専ら、近代の広範に広がっている技術組織の緊急要請に立ち向かうことを求めている。しかし、彼らが、技術的な基準と考慮よりも、むしろ、金銭的なそれへ習慣的に没頭していることは、彼らを相反する目的で働くままにしておく」。こうした結果、「最近になって、多くの不都合なことが、社会全般、また産業社会の特別な部分と階級を悩ますようになったが、それは、主として、産業的事象の管理においてこれらの企業原理を終始固執していることによる」と。こうしてヴェブレンは、現代は製作者本能や親性性向が再び重要度を増してくる時代となっていること、換言すれば金銭的原理に固執してきた略奪期以来の文明史が大きな転換期を迎えつつあることを、やはり技術の動向に基盤を置いて示唆しているのである¹⁵⁾。

それに対して、ボードリヤールは、マルクスをも含めて「生産」に主導性を認める思考を近代に固有の偏見であるとみなし、そこからの脱却を狙いとしていた¹⁶⁾。すなわち、最小限界差異や最小共通文化、さらに文化のルシクラージュ、あるいはオリジナル・コピー・キッチュ・ガジェット、及び擬似イベントとネオ・リアリティといった用語を駆使して遂行されるところの、社会的消費の強制が「豊かさのアノミー」を招来している現代の記号消費社会の解析は、それ自体としてきわめて鮮やかであるが¹⁷⁾、それらは結局、シミュレーション社会としての現代認識へと我々を導く。かつ、そこは、何が真で何が偽であるかが混沌となってしまったハイパー・リアリティの世界、換言すれば、生産の鏡に照らせばくっきり対立するはずの、たとえば資本と賃労働といった諸項が「互換性」を得て、

15) T.ヴェブレン『経済的文明論』前掲邦訳、126, 133, 183-186, 276-281ページなど及び『有閑階級の理論』前掲邦訳、212ページ以下など参照。なお、()内は引用者。

16) J.ボードリヤール、今村仁司訳『生産の鏡』法政大学出版局、16-17ページなど参照。

17) J.ボードリヤール、今村仁司訳『消費社会の神話と構造』紀伊国屋書店、参照

対立のみせかけの下に相互に支えあっている世界というわけなのである。¹⁸⁾

だからまた、そこに展望される脱出口は、労働者による社会主義革命といったものではもはやない。むしろ、1968年のフランスに見られたような移民労働者による山猫スト、非組織的で突然に始まり、要求も交渉もはっきりせず、要求が通らなくても終結するような、ストというより「労働の停止」としてのスト、「ストのためのスト」に期待が寄せられる。特権労働者化し、そのゆえに人種差別、性差別等々と「あらゆる支配的な差別を実行」するようになった、いまや「資本との規則正しい対立の副次的項目」に変えられてしまった労働者が依拠している「生産」の論理への挑戦、換言すれば、労働者をそのように包摂するために生まれた、「仕事を産みだすために仕事をしなくてはならない」というシステムのばかげた円環性を打破する「労働の停止」、自らが「労働者」であることをやめること、自らの「労働者」としての「死」をもってして「システムをその象徴的組織化という根底からゆり動か」すところの「カタストロフィック」な挑戦に、期待が寄せられているのである。¹⁹⁾

浅見の現代消費社会分析は、ボードリヤールの記号消費論を基本的に継承している。そのうえで、カルチュラル・スタディーズにならい、テキスト解釈において読者が決して単に受動的な存在ではないのと同じく、消費者もまた決してメーカーや流通業者あるいはマス・コミュニケーションにひたすら操作されているわけではないこと、むしろ一定の能動的役割を果たしていることに注目する。かつ、そのさい、ややもするとテキスト論的なカルチュラル・スタディーズが陥りがちな、消費者の発揮する能動性を文化的ヘゲモニー支配に対抗的な方向にのみ読み込む弊を避け、現代社会システムの体制的再生産にマス・コミュニケーションが果たしている積極的役割を抉り出そうとしている。²⁰⁾

すなわち、「広告メッセージは、送り手のコードが理解されなかったり、受け手が別のコードを採用するなら、伝達されなかったり、逸脱的な『余剰の意味』

18) J.ボードリヤール、今村仁司訳『象徴交換と死』ちくま文庫、29ページなど参照。

19) 同上邦訳、73-75、83ページ以下参照。

20) 浅見克彦、前掲書、85、93、101-102、114、152-153、165-180ページなど参照。

を帯びたり」するのであり、したがって広告コミュニケーションにおける受け手の解釈は「財をめぐる社会的意味の生産」に関わっている。だが、この受け手の能動性は対抗的な方向にのみ発揮されるとは限らない。むしろ、「なにがしか対抗的な要因があるからこそ、それをターゲットとした文化的なヘゲモニー支配のシステムが社会的に編成されるという理解、これが要求される」。じっさい、現代の広告コミュニケーションが「財の差異的な価値の魅力をディスプレイすることを基本機能」とし、受け手はそうしたメッセージに「消費価値を他に対して差異化する関係の魅力とオモシロサという『遊び』の『メタ・メッセージ』」を見出すこととなっているという関係を踏まえるなら、つまり受け手は「広告によって操作されるのではなく、むしろ消費を差異化するための選択肢としてそれを利用するようにながされる」という関係を踏まえるなら、マス・コミュニケーションは全体構造としては、「消費を『遊ぶ』一つの文化的な態度を社会的に醸成する」という機能を果たし、「消費の戯れを強いる文化的な空気を形成する」ことを通じて、「『生理的必要性』をはるかにこえた消費の増幅と加速化」をもたらすとともに、「『遊び』の悦びを追いもとめる態度をささえることによって、社会の経済的な支配に積極的に寄与する」こととなっているというわけである²¹⁾。

さらに、こうした消費の遊戯化に対置してマルクスが理想化していたようないわば「まっとうな消費」を取り戻す方向に脱出口を探ることは現実的とは解されていない。むしろ、たえず移ろいゆく差異化の海のなかで戯れる消費者が、「差異的な記号の束」と化し、自らのアイデンティティを「断片化」させ、「めまい」を起こし、かつそうした状態に「不安と所在なさ」を覚えるなかで、「社会のさまざまな『現実原則』が忘却ないし破壊される可能性」という方向にこの世界のさしあたりの行く末が展望されている。

すなわち、アイデンティティ危機に対処すべく「個人史的な物語」を求めたとしても、個人史を整理・構成すべき拠り所としての「いまを生きるための思

21) 同上書、114、204、210-215ページなど参照。

考と行為の方向づけ」がさまざまな生活領域での「文化的コミュニケーションの『遊び』ごとに断片化」している現代人においては、「築きあげたと思っただけと置きざりにする」ことを求められる。「われわれの自己は、同時に多くの構成要素からなり、不確かさのもっとも奥深い面は、まさにそれらのうちの一つだけと同一化するさいにわれわれが経験する困難からな」というわけである。こうして現代人は、結局、「さまざまな戯れでの飛散した自分のありよう」を「着脱できる役割としてつきはなす構え」、「演技的アイデンティティ」へと向かう。だが、それは「『遊び』の闘技場とは別のどこかに『本当の』自分をもとめる動きを随伴せずにはおかない。しかも、そうした「シェルター＝親密性の領域」においてすら、他者を前にして習慣的に「思わず演技の殻をかぶってしまった」たり、「差異的な文化価値に感覚をとぎすまし、他者をそうした価値で評価」してしまったりする。「戯れる主体」としての現代人はシェルターの確保にも挫折するかもしれないというわけだが、まさにそうした挫折こそ「現代の文化的支配構造の基盤を揺るがす」可能性をもつものだと解される。なぜなら、シェルターの確保に挫折した主体の行き着く先は、たとえば、「自己の断片化と飛散の不安を隠しつつ」、すべての戯れに対して「ルサンチマンにみちた反発と攻撃」をしかけること、具体的には、すねかじりたちの豪華なファッションや「お受験」への熱狂、²²⁾センスに欠けた「仲間」に対する子どもたちのいじめであったりするからである。

消費の遊戯化にベクトルの方向こそ違え同じ土俵でまっこうから対立する戦略はもはや成り立たないとみなし、むしろ遊戯化の徹底がその極にそれを揺るがす挑戦を生み出す可能性を展望している点で、ここにはボードリヤールとの一定の共通性を読みとることができよう。

IV 総括と展望

このように見てくると、たしかに、消費という営みの意味をきわめて素朴に

22) 同上書、221, 238, 246, 248, 258, 261, 264, 269-271ページなど参照。

まず消費者と財との個人的関係のうちに見ていたマルクスに対して、ヴェブレン以下の三者は消費を他者の視線を強く意識して繰り返される社会的行為と把握している点で共通項を有している。このことは、現代的消費社会の実相に迫るための方法を探るにさいして決して忽せにしえない差異である。

だが、それを踏まえたうえで、消費者は生活者としてのトータルな存在の側面ではないのかという論点にも目を向けて、四者が消費世界と生産や労働世界等との関わりをどの程度に意識していたかを振り返ってみると、ヴェブレンが二つの世界の有機的結びつきをかなり意識していたことが注目される。ここでは、現代における「生産の鏡」の支配の終焉を訴えていたボードリヤール、及び各生活領域においてアイデンティティを「断片化」させながら戯れることにこそ現代的消費者の特質を見る浅見に対して、ヴェブレンとマルクスが相対的に近い位置にいるという構図²³⁾が見出されるのである。

この点は、一方で現代的生活者のアイデンティティがどこまで断片化しているかという事実認識の問題でもあるのだが、他方で「生産」の世界をどのようなものと想定し、またその世界からの規制力をどれほどのものとみるかという問題でもある。まず、後者の論点から取り上げてみよう。

マルクスやヴェブレンが二つの世界に関わりを見ていたのは、労働ないし製作者本能のうちに社会存立の基盤的性格を認めていたからであろう。ヴェブレンについて言えば、「製作者本能」とは「手近な手段の有効な利用と、生活目的に役立つ諸資源の的確な管理」に関わるものであって、「人類の物質的福利に直接貢献」する本能的性癖のなかでは「親性性向」と並ぶもっとも主要なものとなされている。但し、この本能は、他の本能的性癖と競合するとき「自分の地位を主要な関心事として固執すること」はないのであって、「ほどほどのしつこさ」をもって自己主張するとされる²⁴⁾。ポランニー的に言えば、「社会」

23) ヴェブレンも歴史貫通的な諸本能を基底において、それらのうちである時代にどれが主導権を握り、それは他の本能にどのような変化をもたらすかといったかたちで考察しているという意味では、ある種重層構造的展開を行っているなど、意外に類似点は多い。

24) T.ヴェブレン『経済の文明史』前掲邦訳、28ページなど参照。

に埋め込まれた状態で存在しているような「実体」的な経済の世界ということになろう。

第二節で見たように、マルクスの経済学を、その内包していた混乱や誤謬を整理しながら、資本制市場経済システムの歴史的特殊性に向けられた鋭い視線を生かすべく再構成した体系構想においても、価値実体論が立脚する世界はそのような「実体」的な経済の世界にほかならなかった。それはゆとりをもって存在し、一定の弾力性をもって規制を働かせるものと解されている。より厳密に言えば、かの体系構想は流通形態の世界をそれなりに自立した自己組織的なメタ・システムと捉えていたのである。

と同時に、こうした体系構想の再編は価値尺度論のさらなる見直しを促し、売買活動を各市場経済システムにおいて用いられる物差しの質、つまり当該市場経済システムの基本的な枠組みについての相互了解を再生産してゆく場として把握させた。資本の支配する流通形態の世界がメタ・システムであって、それなりの懐の深さを持ち、包摂する要素やサブシステムが具有する論理に一定の発現の余地を与えるものとすれば、この物差しの質ないし相互了解の鍛え方次第で、資本制的な流通形態の世界は価値実体の世界の論理からそれなりに遊離するだけでなく、遊離した世界にシュミレーション世界を奔放に展開したり、しなかったりすることになるというわけである。

したがって、再構成されたマルクスの経済学が具有する価値実体論の世界は、ボードリヤールが想定していた「生産」²⁵⁾の世界とは異なる。たしかに、効率性と不可分ではあるが、そうした規準でぎりぎり締め上げられているのは、マルクス的にはむしろ自己増殖をアイデンティティとする資本制的な流通形態の世界であり、労働と資本が直接に対立するのもこの世界においてなのである。

それゆえ、ボードリヤールとの間で争点となるのは、一方で、弾力的な規制力を持った社会存立の基盤という意味での「生産」も「終焉」したのかということ、換言すればそうした世界からの弾力的規制ないしその論理に即した費用

25) J.ボードリヤール『生産の鏡』前掲邦訳、16ページ以下参照。

が人々の間でどのように分担されあっているかも問われるに値しないほど、現代社会は生産力の発達した世界になっているかということである。

他方で、ボードリヤールらが現代消費社会に見出した「生産の世界からの遊離」は、上述のように、現代において突然に現れたというようなものではなく、むしろ流通形態を自己組織的に展開させるところの資本制市場経済システムが本来的に有している基本性向の現代的発現形態にほかならないことを、再編したマルクスの経済学は抉り出している。この点をまず確認しておきたい。そのうえで、自己増殖をこそアイデンティティとする資本制的な流通形態の世界の論理からの締め上げは、戯れのシュミレーション世界とのみ現代社会を理解できるほどに緩んでいると解せられるかということが問われねばならない。これは、消費の場はシュミレーション世界化しているとしても、それは労働現場や教育現場において締め上げが進んでいることと表裏一体の関係にありはしないかという問いにつながってゆく。

そこでまず第一点について言えば、過労死や長時間労働がなお軽んじえない問題であることが象徴する²⁶⁾ように、社会存立の基盤的世界はなお十分に顧みるに値する意味を有していよう。したがって、自己増殖という特殊な論理に主導されて自己組織化した資本制的な流通形態の世界を相対化するためにそうした参照枠を立ててみることもまた未だ意味を失っていないと解される。²⁷⁾

この問題に関わっては、発展途上国の労働者が先進国のシュミレーション世界を支えていることをも看過してはならない。先進国において正規の賃金労働者が「資本との規則正しい対立の副次的項目」という特権的存在に成り上がりえているのは、発展途上国の労働者に、さらに言えばパートタイム労働との二重負担を引き受けている主婦をはじめとした先進国内の周辺労働者にも支えられているからこそのことなのである。かつ、メタ・システムとして資本制市場

26) これは決して日本だけの特殊な問題ではない。たとえば、アメリカでもホワイトカラーの長時間労働は周知のところである。

27) ボードリヤールは環境問題への関心の喚起も、生産イデオロギーの企みであると評価しているが、「生産」世界の論理の軽視に基づいていよう。J.ボードリヤール『象徴交換と死』前掲邦訳、79ページ。

経済システムを捉えるということは、この経済システムをこのような中心－周辺構造を伴った世界システムとして捉えることにもほかならないこと、つまり再構成されたマルクスの経済学はこうした問題をも本来的に織り込んでいることを付言しておこう。

ついで、消費の世界と生産の世界との関連という対立項に立ち戻れば、たしかに現代消費世界のあり方を生産の世界のあり方の裏面としてのみ説明するものではない。だが、後者からまったく遊離して前者があるのみならずことにも無理があるのではなからうか。

じっさい、日本において記号消費社会が開花した1980年代は、二度のオイルショックを経て強力に合理化が推し進められ、職場が高密度の労働でますます息のつけない緊張感に縛られた世界と化した時代でもあった。しかも、高度経済成長期のように、出世が遅れるという競争ではなく、会社でのサバイバルをかけた競争の下での労働だったのであり、新しく登場する情報技術に取り残されないために休日や帰宅後の勉強を怠れない時代だったのである。²⁸⁾ また、少なからずの主婦はそのように会社人間化した夫と会話も心の通い合いもない生活を送り、充たされない思いを抱くとともに、パートタイム労働者としての負担も抱えていた。²⁹⁾ さらに子どもは、特にそうした母親からの期待の重圧を感じながら、豊かな社会の到来と共に進学率が圧倒的に高まるなかで、エリートへの階梯をのぼってゆく少数者の競争ではなく、むしろ社会人としてのスタート台で不利な立場に立たないがための「降りられない」競争に巻き込まれていた。

こうした強いストレス状態にある生活者がどのような消費に関心を引かれる

28) たとえば、熊沢誠は、働かされているばかりでなく、自らすすんで会社人間化している日本の労働者がどのようにして形成されてきたかについて興味深い考察を行っている。「日本の経営の明暗」筑摩書房、1989年、「能力主義と企業社会」岩波新書、1997年、など参照。

29) 日本の消費社会を考察するうえで若者のみならず主婦というのは重要である。彼女たちこそ少なくとも日常的買い物において財布のひもを握っているのであるから。この点にあらためて注意を喚起してくれたものとして、J.クラマー、橋本和孝他訳「都市と消費の社会学」ミネルヴァ書房、2001年参照。

かは、たとえば斉藤茂男が鮮やかにルポルタージュしているとおりで³⁰⁾。さらに言えば、グローバル化に象徴されるような大きな力に翻弄され、外的環境は変えられないとあきらめて、「身の回りにしか関心がない」と「私的な世界に没頭」³¹⁾するネオ・リアリズムも台頭することとなる。感覚的に差異のみを、刺激のみを追い、しかもたえず更新される差異、刺激を追うという消費スタイルは、決して消費世界内の論理からのみ生じてきていたのではないというわけである。

と同時に、そうした刹那的な消費の世界に何か置き忘れてきたものを感じ、それを確保している世界に郷愁を覚え、せつなさに胸をキュンとさせるようなところもじつは現代の消費者にある。「しあわせってなんだっけ」（明石家さんまの演じたC・Mのフレーズ）と「冗談っぽく、でもマジメっぽく」問い直し、「私の世界を掘り下げ」、「モノそのものとの対等なコミュニケーション」を求め、あるいは傷つけあうことを避けて自らを「カプセル」に包み込むような関係のみに飽きたらず「人に対して想いをはせ」、「共同体的コミュニケーションの中で感じる心の温かさ、熱さ」を求めるというわけである。「セツナ・さ・世代」と呼ばれる所以である。³²⁾となると、マルクスが理想化していたいかにも素朴に見える消費者と財との内在的な関係、さらには財やサービスを介した生産者と消費者とのコミュニケーションの希求も現代の消費者になお認められることに

30) たとえば、『私たちの思秋期』共同通信社、1982年、『娘たちは根腐れて』築地書館、1990年、『飽食窮民』共同通信社、1991年など参照。

31) 香山リカ『＜私＞の愛国心』ちくま新書、2004年、21、39、52-56、60-65、70-77、81-83、115-119、148ページなど参照。ちなみに、香山が把握した「私世界への没頭」は、次に論じる「セツナ・さ・世代」の「カプセル」化に通じるのみでなく、「広い社会を展望する視野」も「人類の将来に対する理念」も持たないのみでなく、ヒトよりモノに目を向けることで人との葛藤を軽減化しようとしている点で、大平健が描出したくモノ語りへの人びとにも通じるようなところがあるように思われる。もっとも、太平自身は外的環境に対する無力感より、「和」を尊ぶ日本人的特性に目を向けているが。太平『豊かさの精神病理』岩波新書、1980年。

32) 電通ヤング&ルビカム・アパス（株）マーケティング局編『セツナ・さ・世代!』、ダイヤモンド社、2001年。18-19、26-27、52-53、64-66、72-73、82、90、95-96、116-120、124-125ページなど参照。

なる。

他方で、いくら商品の差別化が進んだとしても、一人の消費者が関心を抱き、差別化された商品群に通暁しうる分野はきわめて限られていて、自ら関心を持ってない多くの分野では他者に追隨しているだけという現代日本の消費世界の有様についての分析も見出される。³³⁾となると、アイデンティティの断片化が浅見の指摘するほどに進行する消費者が一般化するともちょっと考えにくい。

先にも触れたように、売買活動は自らが参加する市場経済システムで用いることができる物差しの質について相互理解を再生産してゆくという機能を果たしている。地球環境問題が深刻化していつているなかで、浪費生活に対する反省も広がりつつあるし、高齢化社会化への対応、グローバリゼーション下での抽象的な貨幣の暴力への抵抗といった今日的課題と連動しながら、共生をキーワードに物差しの質を問直す運動はたしかに動き出している。³⁴⁾うへの「せつなさ」感覚に期待しながら「まっとうな」消費のあり方の再評価を呼びかけあう動きを強化することも捨てたものではないのではなかろうか。

こうして、消費の場でシュミレーション化が進む現代社会をトータルに把握するためにも、またそれにどのように対抗しうるかをやはりトータルに検討してゆくためにも、マルクスの経済学をその潜ませていた力を解放すべく再構築してみることは、なかなか興味深い試みではないかと解されるのである。

33) 松原隆一郎『消費資本主義のゆくえ』ちくま新書、2000年、150ページ以下。

34) 地域通貨運動はまさにこうした物差しの質の組み換えの提起であるが、環境保護や高齢者ケアに関わって活発化しているNGOやNPO活動も実質的にはこうしたものと解される。ちなみに、「モーレッツからビューティフルへ」に代表されるように、公害問題等を介した高度経済成長時代への反省は、1960年代末からオイルショック前にも散見される。深川英雄『キャッチフレーズの戦後史』岩波新書、1991年。

35) 但し、消費が歴史貫通的に他者の視線を意識して行われること、文化はある意味で「余剰」な活動から生まれることを忘れてはならない。丸山圭三郎『フェティシズムと快楽』紀伊国屋書店、1986年、第2章参照。